小池真理子「姥捨ての街」

工藤　茂

1

小池真理子は平成八年、『恋』（早川書房刊）で第百十四回直木賞をもらった作家である。彼女は受賞決定後の感想を次のように述べている。

〈エッセーを書いて、世間にぽつぽつと名を知られるようになってから十八年。小説を書き始めてから十一年。長かったのか、短かったのか。できるだけおとなしく、器用にやってきたつもりでいて、実は私は途方もなく不器用な人間だったのかもしれない。〉（注）

小説を書いてから十一年目にして直木賞を受けたのだから才能豊かな小説家だと言っていいであろう。小池はフランスミステリーの影響を受けて、心理小説の色合いの濃いミステリー小説を書いてきた作家である。その彼女の小説に「姥捨ての街」という作品がある。この小説は雑誌「オール読物」一九九二年九月号に発表された後、短編集『危険な食卓』（一九九四・一・二五・集英社刊）に収められた。彼女の他の小説と同じように、心理小説の色合いの濃いミステリー小説である。

一九九七年四月二〇日、短編集『危険な食卓』は集英社文庫として再刊された。その解説で篠田節子は小説「姥捨ての街」について以下のように評している。

〈「姥捨ての街」は、人を殺して自首する決心がつかないまま、真夏の街を徘徊していた男が、娘夫婦に捨てられたボケ老人を拾ってしまう話。押入れに死臭がしみつき、妊娠中の妻が苛立ちながら待っている木賃アパートに、男を自分の息子と思いこんだ老女がついてくる。着想だけ見ればスラップスティックコメディーだ。しかし巧緻に練られたプロットと卓越した心理描写によって、なんとも迫力のあるサスペンスに仕上がっている。そして物語を締め括るのは、ブラックな哄笑だ。好みもあろうが、この作品集の中では一番の傑作、と私は思う。〉

この小説の梗概を要領よくまとめた評である。と同時にその特色をも的確に捉えている。〈この作品集の中では一番の傑作〉という意見に私も同感だ。

ところで、この小説を日本の文学を縦に流れている「姨捨のモチーフ」を持つ文学の中に置いて考えてみると、どういうことになるのだろうか。その視点に立って検討を加えていってみたい。

2

小説「姥捨ての街」の発想の奇抜さは、老女を野や山に捨てるのではなく、街（東京の渋谷）に捨てるところにある。街は近代の文学において、詩人が孤独の憂愁に心身を切りさいなまれる空間であった。そういう点では街は確かに姥捨説話の野や山という空間と等価である。その空間に老人を捨てるというこの小説の発想が現代的で奇抜なのだ。

次に老人が捨てられる原因であるが、それが老人性痴呆症にあるという点も、はなはだ現代的である。そして、その捨てられる原因となったボケによって、老人が逆に街（都会）に蘇生する。そこが野に捨てられた老人が若返って幸せになったという昔話と相似していて面白い。つまり、この小説の構成が関敬吾編『日本昔話大成』（角川書店）の五二三D「親棄山」（闘争型の老婆致富譚）の構造に沿って組み立てられていると読めるところが、作者の意図の有無に拘らず、私には興味深く思われるのである。小説「姥捨ての街」にその点を具体的に探ってみよう。

夢の中で彼は闇を見つめていた。一刻も早く車に引き返して、逃げなければと思うのだが、足がすくんで動けない。たった今、関谷の死体を放り出した闇の中で、何かが動いたような気がしたのだ。

雨が間断なく降り続いている。木々の梢を叩く雨音に混じって、何か別の音が聞こえる。がさっ。がさっ。規則正しく草を踏みしめるような音だ。

音の正体を確かめようとして目をこらした。その途端、いきなり闇の中から白いポロシャツ姿の関谷が飛び出して来た。雨で濡れた前髪が青白い額に張りついている。

「おのれ」と関谷は呻いた。「よくも俺を殺したな」

彼は「わーっ」と叫んで目を被った。

自分の声で目が覚めた。

右がこの小説の書き出しである。いかにもサスペンス小説らしい書き出しである。この小説の主人公は街に捨てられた老婆ではなく、右の悪夢に悩まされる男、根岸恒夫である。彼は七十万円の貸金の催促をなじられた上に、妊娠している妻峰子に酔って好色の手を伸ばす関谷にかっとなり、彼をスコッチウイスキーの瓶で殴り殺してしまう。関谷茂はかつて彼が勤めていたクリーニング屋の主人であった。彼はその死体を丸二日間押し入れに隠した後、奥多摩の山中に捨てた。そして、自首するつもりで街をうろつきまわったのだが、どうしても決心がつかず、渋谷のデパートの七階の貴金属売り場の階段室の休憩コーナーの椅子に腰を降ろして、ついうとうととして悪夢に襲われたのだった。

全面ガラス張りになった窓の向こうに、たくさんのビ

ルが見える。スクランブル交差点が見える。歩道の信号が青に変わった。パラソルをさした女たちや、タンクトップを着た若者たちが一斉に歩き始める。遠くにある巨大な電光掲示板には、鈍く光る黄色い文字が浮き上がっている。

デパートの窓外にうつるのは夏の都会の光景である。この都会のデパートがこの小説における姥捨の空間となる。

恒夫の眼に〈中年の男女が老婆を連れて休憩コーナーにやって来〉る姿が映った。

「おかあさん、おしっこは?」と女が聞いた。子供をあやす時のような言い方だった。(略)

「ジュースたくさん飲んだから、おしっこしたいんじゃないの? 行って来たほうがいいわよ。タカシの家に行くには、ここからまた電車に乗らなくちゃいけないんだから」

「そうだねえ」と老婆の声。「そのタカシさんって方、お元気かしらねえ」

「タカシはね、おかあさん。おかあさんが産んだ子供なのよ。忘れたの? 息子なのよ。一番下の息子。あたしの弟。これからそこに行くのよ。何度も言ったでしょ?」

「ご親切なことで」老婆は、心底感謝するような口調で言った。「どこのどなたさんか存じませんが、いろいろご親切に教えてくださって」

「また始まった」女が溜め息をつくのが聞こえた。「あたしのことも忘れて。まあ、このほうが都合がいいけど」(略)

老婆が言った。「ちょっと伺いますけど、お手洗いに行くにはどうやって行けばいいんでしょう」

「あたしが連れてく」女が言った。(略)

「ここでお別れだな」男が低い声で言った。「さよならおかあさん」

「はい、さよなら。暑いですからねえ。どうかお達者で」

「おかあさん。ほら、バッグを忘れてるわよ。ちゃんと手に持って」

「あらあら、私としたことが。ほんとに何から何まで気を使ってくださって、すみませんねえ」

階段を降りて行く二つの足音が響いた。すぐに女だけが急ぎ足で戻って来た。

「身元が割れるものは持たせてないだろうね」男がせかせかと聞いた。煙草に火をつけるライターの音がした。

「もちろんよ。ネームのついてるようなものは全部、取り上げてあるし。財布の中にはお金以外、何も入れなかったから」

「なんだかいやな気分だな」ヘビースモーカー特有の咳がひとつ。

「こっちだってい気分じゃないわよ」

「やっぱりやめたほうがいいんじゃないか。この暑さだし、あの年でふらふら歩いていたら、ぽっくりいっちま

うかもしれない」

「いまさら、やめようって言うの？　やめてよ。もう我慢ができない、って言い出したのはあなたのほうじゃないの」

「そりゃそうだけどさ。でも……」

「また、連れて帰って苦労するつもり？　冗談じゃないわよ。あたしはごめんだわよ。こっちが食べてくだけで、精一杯なのに」

男はごまかすように激しく咳きこんでから、黙りこくった。

長い引用になってしまったが、これがこの小説の「姥捨」の場面である。中年の夫婦はボケた妻の母を東京に捨てるために、高崎から上京して来たのであった。二人は渋谷のデパートで老婆をトイレに行かせ、そのまま帰ってしまう。

姥捨説話においては、老婆は常に人里離れた奥山や野に捨てられるか、島流しにされることになっている。ところがこの小説では、人々であふれんばかりの街に捨てられるのである。人里離れた山や野では金を持っているだけでは生活できない。が、街は金があれば生活を営むことのできる空間である。捨てられる人間はさておき、捨てる側の人間にとってはそれがいささかの救いになろう。中年の夫婦が老婆を捨てた後、東京に住んでいるらしい妻の弟に電話をしているところにもそれが読み取れる。しかし、同時に街はいろいろな危険を含み持ち、隣家に餓死者がいても誰も気づくことのない非情な空間でもある。中年夫婦に置き去りにされた老婆は多様な危険にさらされる可能性を持つことになる。そのような老婆の姿を、作者は恒夫の眼を通して次のように描いてみせる。

（老婆は）片手に小型のボストンバックを持ち、もう一方の手で階段の手すりを握りしめ、ゆっくりと一足一足、確かめるようにして階段を上がってくる。

鼠色の薄手の着物に草色の帯。薄くなった白髪頭に小さく結った髷が見える。丸い顔。少し曲がった腰。二つに折ったら、手にしているボストンバックの中にでももぐりこめそうなほど小さな身体。眼鏡はかけておらず、しょぼしょぼした小さな目が、襞のように重なったまぶたの皺の奥で人なつこそうに瞬いている。

頼りなさそうな老婆の様子が〈薄くなった白髪頭に小さく結った髷が見える。丸い顔。少し曲がった腰。二つに折ったら、手にしているボストンバックの中にでももぐりこめそうなほど小さな身体〉という表現や、この箇所の直後に出てくる〈老婆は忘れていたことを必死で思い出そうとでもするかのように、階段の上で立ち止まり、不安げにあたりを見回した〉という部分によく表れている。ところが、この老婆はいつのまにか恒夫の後を追って、交通事故に遭うこともなく、大崎にある彼の安アパートまでついて来るのである。

アパートに帰った恒夫に妊娠中の妻峰子は言う。

「のんきなもんね。こっちは何してたと思う？　カレーを作ってたのよ、カレーを。匂いが消えるんですってよ。

そんな話をずっと前に聞いたのを思い出したのよ」

「何の匂いが消えるって？」

「死体よ」

恒夫には匂わない押し入れの死体の匂いが、妊娠している峰子には匂うのだ。彼女は恒夫に押し入れを嗅いでみてくれという。この会話を老婆は聞いていた。老婆の名はハルといった。彼女は恒夫を自分の息子のタカシと思いこんでいるらしく、にこにこ笑いながら彼らのアパートに入りこんでしまう。峰子は恒夫に「遠くに捨ててくればいいのよ」とハルを捨ててくることを催促する。しかし、恒夫は捨てることができかねている。こうして老婆は、知恵によってではなくボケによって街の中に生きていく。

関谷の死体が奥多摩山中で見つかったと夕刊に載った数日後、二人の刑事が恒夫夫婦のアパートに現れる。その刑事たちにハルは、自分を捨てるために高崎から出て来て都内をうろついていた息子夫婦と、恒夫夫婦とを混同して喋る。その結果、恒夫夫婦の不在証明が成立することになる。つまり、恒夫たちは老婆の知恵によってではなく、ボケによって救われたのであった。だが、峰子は言う。

「あたしだって、あの婆さんに感謝してるわよ。だから、こんなに毎日、おいしい御飯、食べさせて、お風呂で背中も流してやって、だらだら続くどうでもいいお喋りの相手になってやってるんじゃないの。でもさ、感謝もこのくらいで充分よ。充分すぎるわよ。あんた、知ってんの？　婆さんが来たおかげで、せっかく関谷からくすねたお金が、減ってくじゃない。なにしろ、あの食欲ときたら馬なみなんだから。昨日だって、奮発して買ったショートケーキ、あたしとあんたの分まで食べちゃって、おまけに家中のお菓子をあさる始末よ。もう、うんざり。二週間近くたつけど、警察もあれから来ないし、やっと手頃なアパートも見つかったことだし。あんた、頼むから、婆さん、こっそり捨てて来てよ。ね？　いいでしょ？」

恒夫は老婆を捨てるために渋谷のデパートの屋上にいた。世間はお盆休みの真っ最中であったが、街はいつものように賑っていた。〈さよなら、婆さん……心を鬼にしてそうつぶやき、踵を返そうとしたときのことだった。恒夫はハルが誰かに話しかけられて、嬉しそうにうなずいているのを見て立ち止まった〉。ハルに話しかけているのは、六十歳位の太った婦人だった。

その婦人に向かって今度はハルが熱心に何か話しかけている。恒夫はいやな予感に襲われる。案の定ハルは〈カレーで死体の匂いを消しただの、死体を捨ててきただの〉とその婦人に話していたのである。

〈婆さんはボケてはいるが、耳にした会話は断片的に覚えていられるのだ。そして、話相手を見つけるや否や、嬉々としてその話を始めようとするのだ〉。そう恒夫は悟り、危険だと思った。恒夫は太った婦人に老婆の息子だと名のり、母の頭が少々いかれているものだからと言い訳をする。その恒

夫にハルは頭を下げて「お久しゅうございますねえ。どこのどなたさんか存じませんが、お声をかけてくだすって、本当にありがたいことで」と礼を言う。

「お気の毒に」と婦人はいたわしげにつぶやいた。

恒夫はハルの手を取り、婦人に背を向けて歩き始めた。湿った一陣の風が吹いて来て、作り物の親子の足元を通り過ぎていった。

峰子は何と言うだろう、と彼は沈みこむような気持ちで思った。赤ん坊もまぜて、四人家族になったこと、ならざるを得なくなったことを知ったら、彼女は何と言うだろう。

街に捨てられた老婆はこうして、ボケの力によって恒夫の「作り物」の親となり、「四人家族」の一人に蘇生する。

もっとも、もう少し注意深くこの小説を検討して見ると、そこには不都合なところもあることが見えてくる。例えば、二人の刑事はさらに事件を追求して戸籍や住民票についても調査するであろうし、関谷茂の所持金の行方も追求するであろう。その結果は明白である。しかし、恒夫の心理を中心に描いたこの小説では、必然的に先の引用の部分に到達するように構成されている。読者にはその必然が無理なく納得される。こうして、老婆は街の中で蘇生するのである。

作者はこの短篇小説を次のように結ぶ。

回転木馬の歓声が轟いた。ハルは日も照っていないのに、まぶしそうに目を細め、懐かしそうな、満足げな表情で回転木馬を一瞥すると、つと恒夫に寄り添って囁いた。

「今夜はカレーライス食べたいわねえ」

何とも見事な結びである。

3

「姨捨」の流れを汲む現代の文学で姨捨の文学空間を都市に設定した作品は、過去において一編しかなかった。それは一九八六（昭和六一）年に発表された山本昌代の小説「デンデラ野」である。それ以外は戦後に発表された里見弴の「姥捨」にしろ、井上靖の「姨捨」にしろ、深沢七郎の「楢山節考」にしろ、姨捨の文学空間は都市ではなく、鄙に設定されていた。山本昌代の小説「デンデラ野」については稿を改めて述べるつもりなのでここでは詳述しないが、山本のそれは都市は都市でも小池のそれとは異なり、都市郊外の団地が設定されていた。このように姨捨の文学空間を都市に設定することの発見は、戦後の社会構造の必然だったと考えられる。それを逸早く掬い取ったのが山本昌代の小説「デンデラ野」であり、それを都市空間を変更して継承したのが小池真理子の小説「姥捨ての街」だったのである。おそらく作者にはそれを継承したという意識はなかったであろうが、発表の順序から言えばそういうことになると思われる。

小池の小説「姥捨ての街」はサスペンスであって「姨捨」説話の再生がねらいではなかったであろう。しかし、それを

「姨捨のモチーフ」を持つ日本文学の流れの中に置いて見ると、先にも述べたとおり、その空間設定の特色とボケ（老人性痴呆症）による救済という特色によって、現代の姨捨説話と言うことのできる小説になっていたのである。

（注）「大分合同新聞」（平成八年一月二十八日）朝刊